

2019/05/05

「苦情」

「さばいてはいけません。さばかれないとめです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」（マタイ 7:1-5）

この世は互いに苦情を言い合う世界です。子どもは親に、親は子どもに、あるいは、妻は夫に、夫は妻にそれぞれ文句を言い合い、さらに、上司、部下、教師、店員……と、出会うすべての相手が苦情の対象になります。

しかし、聖書は「さばいてはいけません」と教えてています。つまり、「苦情を言ってはいけない」ということです。争ったり、裁いたり、苦情を言い合ったりすることは、主の御心ではないのです。

■苦情に隠された類似点

苦情とは、一見、互いの相違点を主張しているように見えます。しかし実際は、自分との類似点を映したものです。苦情を申し立てる人とその相手に類似するのは、次のような点です。

1. 自分は不完全だという現実を無視している

「苦情を言う」とは、相手の不完全さを指摘する行為ですが、相手の不完全さを指摘するとは、自分が不完全であるという現実を無視した行為です。類似しているのは、自分が不完全であるという現実を無視しているという事実です。

2. できないという現実を無視している

苦情とは、相手に対して「～ねばならない」という要求を突きつける行為です。それは、自分自身が周囲の要求や自分自身の要求を満たすことが出来ないという現実を無視する行為でもあります。

人は、周囲の要求に応えようと生きています。しかし、どうやってもすべての要求に応えることはできません。要求に応えることができたとしても、要求は常にエスカレートするからです。それなのに、相手には要求に応えろと苦情を言うのです。これが「苦情を言うこと」の互いの類似点です。

3. 死という普遍的な現実を無視している

苦情を言うことによって、人は自分自身に突きつけられている普遍的な要求を無視しています。それは、「死」という要求です。人は必ず老いて死にます。苦情を言い合うことによって、この現実を無視しているのです。

イエス・キリストはある時、自分が死ぬことを考えるのは愚かであることを教えるために、豊作の年に大きな倉を作りこの先何年も安心だと言った金持ちがその日の内に死んだというたとえ話をなさいました。あなたはこの愚か者と変わらない生きかたをしていないでしょうか。死という要求を無視して幸せに生きられるかのように生き、互いに苦情を言いあうとは、なんと滑稽なことでしょうか。もし、明日死ぬことがわかつていたら、あなたはどうするでしょうか。おそらく、不安を神に祈ることでしょう。そんな時、人に苦情や不満をぶつけて過ごすのは時間の無駄です。神に心を向ける、これが死の要求に応える生き方です。

苦情を訴える生き方とは、自分の現実を無視する生き方です。この世では、人生の逃げ道を提供する人が称賛されます。芸術家や作家、エンターテイナーなど、彼らがしていることは、楽しみや批判に目を向けさせ、自分自身の現実から目をそらさせることです。

しかし、聖書は、相手のちりに目を留めるのではなく自分の中の梁を見よ、つまり自分の現実を見なさいと訴えています。人は皆、自分の現実を無視して、つまらない要求には応えようとし、できないと文句を言い、人に対してできない要求を突き付けあう生き方をしています。その私たちに、「裁いてはいけない」と聖書は教えているのです。

■律法主義と福音

人間は誰もが「理想の自分と現実の自分」という二面性を持っています。たとえば、人を愛するのは良いことだが、現実には愛せないといった具合です。このように人間について、どのような生き物かを問うのが哲学です。哲学では、人が抱えるこの矛盾について、「善と悪」「永遠性と有限性」などと表現されたりもしますが、これを解決する道を探すのが、多くの哲学者のテーマです。その中でキルケゴー尔は「これは自分の努力で統合できるものではなく、矛盾した自分をそのままで受け入れることでしか解決しない」と主張しました。これは、聖書の教えです。

自分の力で、ダメなものから良きものになろうとすることはできません。自分の目の中の梁は自分で取り除くことはできないのです。このことを無視してしまうと、互いに裁き合う結果になります。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」（ローマ 7:15）

パウロは、聖書が教える良いことができるようになりたいと願って、真剣に生きていました。それなのに、どんなに頑張っても実行できるようになりきれない自分を見つけてしまう

のです。彼は、自分の中に矛盾があることに葛藤していました。

パウロのような生き方を律法主義と言います。聖書に書かれていることをできるようになるのだと努力する生き方です。しかし、彼はその結果、御言葉を実行できない人を裁き、クリスチヤンを迫害しました。彼にしてみたら、何の行いもできないくせに罪が赦されて天国に行けるなど、聖書の冒頭以外の何ものでもありません。

しかし、結局自分も克服できなかったのです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」（ローマ 7:24-25）

パウロは、イエス・キリストのゆえに、この矛盾を抱えた自分を、そのまま自分自身として受け入れることができました。罪を犯してしまう自分と、神に従おうとして神の律法を追い求める自分、その両方を受け入れていいのだと教えられたのです。彼はこれを「弱さ」と呼びました。矛盾を抱える弱さの中に、神の恵みが働くことを知り、これが神の福音だとパウロは気づいたのです。

神はあなたの現実をそのまま受け入れなさいと言っておられます。自分は弱さを克服したなどと言えば、現実の自分を無視した生き方になり、裁き合い、嘘を言い、自分でない自分を生きようとする結果になります。

私たちの現実、それは必ず死ぬという現実です。これを受け入れて感謝するしかないのです。イエス・キリストは、罪人をありのままで愛し、受け入れ、苦しむ者と共に苦しまれました。そして、どうすることもできない自分をそのまま私のところに持ってきてきなさいと語ってくださいました。イエス・キリストはあなたの重荷をそのまま主のもとに持つて行くようにと教えてくださいました。

御言葉を熱心に学び、御言葉に従って生きたいと願ったパウロは、りっぱな自分になれば愛されると思いこみました。しかし、イエス様が教えてくださったことは、あなたはそのままで受け入れられるから、何も心配しなくてよいということです。

■なぜ神は戒めを守ることを要求したのか

神は聖書を通して、私たちに多くのことを要求しています。十戒を与え、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」と教え、「あなたの敵を愛しなさい」と教えたのは、神です。しかし、このような戒めがなければ、パウロも律法主義に陥ることはなかったかもしれません。従うことができなくても受け入れてくださるのであれば、律法など要求しなければいいのにと思いそうなものです。なぜ神は、従うことのできない律法をわざわざ要求しておられるのでしょうか。聖書はその問い合わせに対して、明確な答えを与えています。

「では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。」（ガラテヤ 3:19）

律法の目的は、私たちに違反を示すことだというのです。つまり、御言葉を実行し、「自分は神に言われていることができない」と気づかせるためのものであるということです。

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」

（ガラテヤ 3:22）

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」（ガラテヤ 3:24）

神が私たちに律法を与えたのは、私たちが自分の現実を知ることで神に頼るしかないと知るためです。つまり、律法の目的は、私たちが神により頼むように導くものであるということです。

「苦情」とは、自分の目の中の梁を無視して人の目の中のちりに文句を言うようなもので、自分の現実を無視している行為です。神が私たちに戒めを与えたのは、人に苦情を抱く時こそ、自分の現実を知って神に助けを乞うようになってほしいと願っておられるからです。

そもそも、人が苦情を訴えるのは、その人の根底に不安があることが原因です。それは、愛されていることがわからないという不安です。人は神のいのちによって造られたので、私たちの魂は神を知っています。しかし、この地上では神がわからないので、愛されていることがわかりません。また、神が持つておられる永遠性もこの地上では得られず、自由も得られません。私たちがこの地上で得る愛も自由も、魂が知っているものには程遠く、私たちの魂は「こんなはずではない」と不安を抱えているのです。人が、愛されることや自由を求めるのは、実は本人も気づかないうちに魂が神を求めているからなのです。

魂は永遠を知っているのに肉体が有限であるがゆえに、誰もが、善を求めて行えず、現実と理想が異なるという矛盾を抱えています。この重荷を神の前に差し出して助けを乞う時、私たちは無条件で愛されていることを知り、そのことを通して不安から解放されていきます。この問題を解決できるのは神だけです。あなたが重荷を背負う必要はありません。苦情を言って生きる人生をやめ、重荷はそのまま神のもとに持って行き、苦情はそのままイエス様に差し出せばよいのです。その結果、神にいつも目が向くようになり、苦情ではなく、神に感謝する生き方になれば幸いです。

自分で解決することのできない問題に取り組む必要はありません。矛盾は矛盾のまま神に差し出せばよいのです。神がその矛盾を解決してくださいます。